

「杉谷キャンパス日本語コース」のプログラム評価の試み

鎌田 倫子

1. はじめに

プログラム評価は、基本概念も、評価の手法も確立しているとは言い難く、日本ではまだなじみの薄い概念である。しかし、海外では実証主義的評価と自然主義的評価のパラダイム論争を経て、現在では双方を併用する方法も認められ、評価についての理論も実践的な研究も進んでいる。当然のことながら日本でも何らかのプログラムを実施する以上、その意義と有効性を検証していくことは、プログラムの実施責任者や参加者に対する説明責任を果たすためにも、改善のためにも必要なことである。しかし、評価の専門家ではないプログラム担当者がプログラム評価をすることはかなり敷居が高いのが現状である。

富山大学杉谷キャンパスでは、2001年度以降、留学生相談室が「日本語コース」を実施してきた。しかしながら、2005年10月の大学統合に伴い、今後、プログラムの実施責任者が新富山大学の学長あるいは留学生センター長に移行することが考えられる。そのため、プログラムの実施担当者として、利害関係者に対する説明責任を果たすために、何らかの客観的なプログラム評価の必要性を痛感してきた。そこで、統合を機にプログラム評価について学びつつ、プログラム評価を試みることにした。

以下は、その道程における中間報告であり、事例研究の予備調査の記録である。

2. プログラム評価とは

最近、評価の重要性の高まりとともに、評価研究も盛んになってくる徴候が現れてきている。2006年7月の日本語教育学会主催の教育実践フォーラムでは「評価から実践へ」がテーマであったし、日本語教育に対するプログラム評価についての研究会、「プログラム評価研究会」も結成され、また、留学生に対する日本語短期プログラムについての事例研究を基にした、プログラム評価の研究も現れてきている（札幌 2004、札幌 2006）。

札幌 2004 では、プログラム評価の設計に関して、その基本的な構成要素として、以下の5W1Hが挙げられている。

Why：どんな目的で評価をするのか

When：いつの時点で評価をするのか

Who：誰が評価をするのか

What：何を評価するのか

Where : どこに対して報告されるのか

How : どのように評価をするのか

そして、プログラム評価における「評価計画・準備」と、1つの評価課題に対するトライアングレーション(三角測量:複数の調査を併用すること)の重要性が強調されている。

以下の「杉谷キャンパス日本語コース」のプログラム評価は、札幌2004の基本理念を参考に、複数の客観的な調査を根拠とした、評価の事例研究調査の一環と位置づけられる。しかし、まだ十分にデザインして実施したものではなく、あくまでも現状把握のための予備調査である。

3. 調査の方法と目的

プログラムの評価をするに当たっては、まずそのプログラムの目標を明確にしなければならない。その目標を達成できているかどうか評価されることになるからである。しかし、プログラムの目標に関しても、プログラムの利害関係者は、それぞれの立場から異なったニーズをもち、ニーズに従って異なった目標をもっていることが予想される。

そこで、まずプログラムに対するニーズについての予備調査として、留学生と留学生受け入れ専門教員に対して、質問紙によるアンケート調査を実施した。さらに、プログラムを担当する日本語教員に、現状でのプログラムに対する満足度をメール・アンケートにより調査した。プログラムの利害関係者3者に調査することで、ニーズに関するトライアングレーションを目指した。各利害関係者のニーズを把握した上で、結論として、プログラムの目標を明確化する事を目的としている。札幌2004にいう5W1Hに即して言えば以下のようなになる。

Why : どんな目的で評価をするのか

- 1) プログラムの利害関係者3者が、プログラムにどのような関心を寄せ、どのようなニーズをもっているかを明らかにする。
- 2) 利害関係者3者のプログラムへの関わり方とニーズを把握した上で、プログラムの目標を明確化する。

When : いつの時点で評価をするのか

統合を機にできるだけ早い段階で調査を実施するべきであると考えた。しかし、調査票の準備に時間を取られ、留学生に対する要望調査は統合直後の2005年10月に実施できたが、専門教員に対する調査は半年後の2006年4月、日本語非常勤講師に対する要望調査は2006年8月となり、結果的に時差がでた。

Who : 誰が評価をするのか

予算措置もない予備調査であるので、内部の専任日本語教員が評価することになる。当該日本語コースの実施担当者であるので、内部事情についてはよく把握しているが、評価研究の専門家ではなく、評価の手法や妥当性、客観性が問題となる可能性がある。複数の

アンケート調査を併用することで客観性を高め、こうした弱点を補って行く。

また、調査票の質問項目等について、評価研究者である金沢工業大学の札野寛子氏と留学生相談室の構成員である薬学部留学生担当の柏木寛氏に助言を仰ぎ、第三者の視点を取り入れ、客観性を高めることに努めた。

What：何を評価するのか

プログラムの利害関係者3者へのアンケート調査の結果や感想から、各々のニーズと満足度を把握し、現状でのプログラムの実施結果に対する満足度を評価する。

Where：どこに対して報告されるのか

この評価は、実施責任者の要求によるのではなく、コース担当者が自発的に実施するものであるが、結果は実施責任者やコース参加者など、コースの利害関係者に対する説明責任を果たすために、紀要や研究会などで報告していく。また、留学生相談室のホームページなどでも結果を公表する。

How：どのように評価をするのか

プログラムの利害関係者3者に対して、質問票による調査を4件実施した。1) 留学生に対する「日本語と日本語クラスについてのニーズ調査」と18年度前期の「授業後アンケート」、2) 留学生受け入れ専門教員に対する「日本語コースに関する要望調査」、3) コース担当者の日本語教員に対する「プログラムの構成要素の重要度/満足度調査」である。今回、この3者への4件のアンケート調査の一次分析結果について、以下に報告する。

4. 杉谷キャンパス日本語コースの概要

4. 1. カリキュラムの変遷

富山大学杉谷キャンパス日本語コースはクラス数の変遷から以下の4期に分けられる。

1) 学生課補講期

2000年度まで、留学生に対する日本語プログラムは、学生課の主導で、非常勤講師2名(中国人講師1名、日本語講師1名)により、薬学研究科大学院授業として1コマ、日本語補講として2コマ、計3コマ実施されていた。全留学生約60名に対して3コマではレベル別に行うことはできないため、結果的に講師の使う媒介語(中国語と英語)により中国人留学生とその他の留学生に分かれた母語別クラスとなっていた。

2) 必修日本語コース(開設当初)

2001年4月、日本語・日本事情担当教員(著者)の着任により、まず、補講と大学院の日本語クラスが総合日本語コースとして統合、再編された。2001年度前期、初級と初中級の2レベル、5コマからスタートし、次第にクラス数を増やしてきた。

3) 必修日本語コース(最終期)

2005年度後期には5レベル10コマのレベル別日本語コースが整備された。2001—2005年度

入学の医学研究科の大学院生に「日本語・日本事情」が必修とされたため、ゼロ初級から上級までの日本語力を有する医学研究科の全留学生に対応するために、最小限5レベルの日本語クラスを開講する必要があったことによる。全10コマの授業でこれに対応するために、初級2(A1,A2)、初中級1(B)の3クラスは各週2コマ、中級(C)、中上級(D)、上級(E)の3クラスは各週1コマ、目的別クラス1コマ(漢字1)と、各クラスの授業数は週1-2コマと少なかった。この間非常勤講師の授業数は3コマから5コマに増え、専任1名が5コマ担当し、10コマで辛うじてレベル別日本語コースとして運営していた。

4) 選択日本語コース(現行)

2006年度春学期から、上級(E)クラスを廃止し、コースを初級寄りにシフトし、4レベル11コマの日本語コースとした。初級レベル2クラス(A1,A2)を統合し、初級(A)を週4コマ、初中級(B)、中級(C)、中上級(D)を週2コマとし、目的別の会話クラス週1コマ(Bレベル)とするカリキュラム改革を実施した。統合による大学院の再編により、2006年4月より医学研究科となった大学院では、医学系は必修単位、薬学系は自由単位であった留学生の「日本語・日本事情」を薬学系に合わせて自由単位とした。その結果、上級まで開設しなければならない必修単位の義務から解放され、初級レベル寄りのカリキュラムへの変更が可能となったことによる。(末尾[参考資料1]参照)

4. 2. 日本語コースの実施体制と教授法

杉谷キャンパス日本語コースで実施されている日本語教授法は、日本国内で最も一般的に行われている直接法による伝統的な文法積み上げ型教授法に、ややコミュニカティブ・メソッドを取り入れた折衷法である。アメリカ型教授法の非常勤講師による中級(C)クラスの1コマのみ、かなり純粋なオーラル・コミュニカティブ・アプローチで実施されている。

初級のAクラスは杉谷キャンパスで開発した教科書『りゅうがくせいのための たのしいにほんご』により、専任教員3コマと非常勤講師1コマで、週に計4コマ開講されている。初中級Bクラスは、現在開発中の教科書『留学生のための楽しい日本語II』の試作版を使い、専任教員1コマ、非常勤講師2コマ、計3コマが開講されている。中級Cと中上級Dクラスは、専任教員1コマ、非常勤講師1コマ、計2コマで、総計11コマの日本語クラスが開講されている。

どのクラスも、専任教員(1名、週6コマ担当)と非常勤講師(5名、各週1コマ担当)のチーム・ティーチングにより、互いに密に連絡をとりあって運営されている。

5. 調査票によるニーズ調査の結果

5. 1 留学生へのアンケート調査の結果

留学生全体に対するアンケート調査「日本語と日本語クラスについてのニーズ調査」は、2005

年 10 月に行い、44 人から回答を得た。日本語学習の経験、日本語学習の目的、日本語能力、日本語コースの必要性に関する主な項目に対する回答の集計結果を以下の [表 1-1] [表 1-2] に掲げる。(調査票は末尾 [参考資料 2] 参照)

[表 1-1] 留学生アンケート集計表 日本語のニーズについて

1. 日本語学習の必要性

回答者 44 人	有	無	無記入	合計
1.1 日本語学習の経験	42 (95%)	0 (0%)	2 (5%)	44 (100%)

1.1.1 日本語学習の目的 記入者 38 人中 (複数回答)	日本語能力向上	31 (82%)
	日本社会文化の理解	26 (68%)
	単位のため	1 (3%)
	日本人と友達になる	17 (45%)
	授業、ゼミの理解	26 (68%)

回答者 44 人	必要	必要ない	無記入	合計
1.2 日本語は必要か	41 (93%)	1 (2%)	2 (5%)	44 (100%)

1.2.1 必要な場面 38 人中 (複数回答)	研究室	30 (79%)	1.2.2 必要な能力 36 人中 (複数回答)	話す	34 (94%)
	事務室	14 (37%)		聞く	26 (72%)
	近所	12 (32%)		読む	18 (50%)
	教育関係	13 (34%)		書く	18 (50%)
	店	41 (93%)			

回答結果から、一般的に「日本語能力が必要だ」とした留学生は 41 人 (93%) で、日本語が必要な場面は第一に「店」(41 人 93%)、次いで「研究室」(30 人 79%) となっている。「日本語能力が必要でない」理由を記入した 2 人は、「日本人と問題がない」と「日本語能力がある」ことを挙げ、問題がないからであることがわかった。必要な能力としては、まず「話す」こと (34 人 94%)、次いで「聞く」こと (26 人 72%) の 2 点について必要とする回答が多いが、「読む」こと、「書く」ことまで必要とする留学生は半数に留まる。

留学生の間では、「日本語能力」に対する必要感が非常に強く、「日本語学習」の第一の動機も「日本語能力の向上」(31 人 82%) となっている。日本語が必要なので日本語を学習する、そのために日本語クラスに参加するという形になっている。

統合後、五福キャンパスの日本語補講コースにも参加することができるようになったが、平成 17 年度後期、実際に五福キャンパス日本語補講コースに参加した杉谷キャンパスの留学生は 2

名であった。五福キャンパスの日本語コースに「参加したい」(12人 29%) 留学生より、「参加したくない」(21人 51%) 留学生の方が多いが、それは「時間がない」(19人 76%) ことと「交通不便」(13人 52%) なことが主な理由となっている。

「シャトルバスがあっても行かない」(7人) 留学生の方が、「あったら行く」(4人) 留学生より多いので、「交通不便なこと」より、「時間がない」ことの方が大きな問題であると思われる。その結果、同様に「杉谷コースがなくても五福キャンパスには行かない」(7人) とした留学生が「なければ五福に行く」(4人) 留学生より多いという結果になっている。生命系の実験に忙しい留学生にとって「時間がない」(27人 75%) ことが、「杉谷コースが必要」(35人 85%) な最大の理由となっている。

[表 1-2] 留学生アンケート集計表 日本語コースについて

2. 杉谷日本語コースの将来

回答者 41 人	参加したい	参加したくない	どちらとも 無記入	合計
2.1 五福コースに	12 (29%)	21 (51%)	8 (20%)	41 (100%)
回答者 41 人	必要	必要ない	無記入	合計
2.2 杉谷コースは	35 (85%)	2 (5%)	4 (10%)	41 (100%)

2.1.1 参加したくない理由

記入者 25 人中 (複数回答)	時間がない	19 (76%)	記入者 11 人中	行く	行かない
	交通不便	13 (52%)	2.1.2 シャトルがあれば	4 (36%)	7 (64%)
	クラスが多い	6 (24%)	2.1.3 杉谷コースがなければ	4 (36%)	7 (64%)
	杉谷にある	12 (48%)			

2.2.1 杉谷コースが必要な理由

記入者 36 人中 (複数回答)	時間がない	27 (75%)
	近くて便利	28(78%)
	クラスが少なくて出やすい	12 (33%)

以上、留学生アンケート調査の結果から、留学生は日本語能力の必要性を痛感しているが、五福キャンパスまで行く「時間がない」ことにより、杉谷キャンパスの日本語コースで「日本語能力を向上させたい」という強い要望があることが明らかになった。

5. 2 専門教員へのアンケート調査の結果

2006 年 4 月に専門教員に対するアンケート調査「日本語コースに関する要望調査」を行い、杉谷キャンパス全 63 講座に配布し、うち 20 講座から回答を得た(調査票は[参考資料 3]参照)。全体の回収率は 32%だが、留学生が在籍している 23 講座中 19 講座 (83%) から回答があった。

その点を考慮すると、回答率は必ずしも低くなく、留学生が在籍する講座ではこの問題に対する関心がむしろ高いと考えられる。日本語のニーズと杉谷コースの今後についての主な質問項目についての回答の集計結果を、以下の〔表2〕に掲げる。

〔表2〕 専門教員アンケート集計表

日本語のニーズと杉谷コースの今後の方針について (有効回答 20 件中)

1. 日本語の必要性	必要	必要ない	無記入	合計
1.1 日本語は必要か	18 (90%)	1 (5%)	1 (5%)	20 (100%)
1.2 全員に初級が必要か	12 (60%)	5 (25%)	3 (15%)	20 (100%)

1.1.1 必要な場面 (複数回答)		
	研究室	8 (40%)
	事務所	8 (40%)
	病院	9 (45%)
	大学の外	17 (85%)
	教育関係	6 (30%)

	行かせる	行かせない	無記入	合計
1.3 必要な人は五福コースに行かせるか	8 (40%)	7 (35%)	5 (25%)	20 (100%)
1.4 出来ない学生は杉谷コースに行かせるか	16 (80%)	2 (10%)	2 (10%)	20 (100%)

2. 今後の方針への賛否	賛成	反対	どちらとも 無記入	合計
2.1 半年は全員出席させる	15 (75%)	2 (10%)	3 (15%)	20 (100%)
2.2 Oレベルのクラスを毎日にする	10 (50%)	6 (30%)	4 (20%)	20 (100%)
2.3 初級中心のコースにする	12 (60%)	4 (20%)	4 (20%)	20 (100%)
2.4 杉谷コースを充実する	9 (45%)	4 (20%)	7 (35%)	20 (100%)
2.5 五福コースへ行かせる	1 (5%)	13 (65%)	6 (30%)	20 (100%)
2.6 授業を英語でする	6 (30%)	9 (45%)	5 (25%)	20 (100%)
2.7 家族や研究員は入れない	5 (25%)	9 (45%)	6 (30%)	20 (100%)

「日本語が必要だ」とする件数は 18 件 (90%) で、「日本語を学習させる」18 件 (90%) と共に留学生の回答と同じ程度であるが、「五福コースに参加させる」は 8 件 (40%)、「杉谷コースに参加させる」は 16 件 (80%) で、「全員に初級が必要だ」と思うのは 12 件 (60%) であった。杉谷コースの今後の運営方法として、支持が半数以上であったのは、「半年は全員出席させる」(15 件 75%)、「初級中心のコースにする」(12 件 60%)、「O レベルのクラスを毎日にする」

(10件 50%) の3件であった。「杉谷コースを充実する」(9件 45%) 必要はあまりないが、杉谷コースをなくして「五福コースへ行かせる」(1件 5%) つもりもないということがわかる。

すなわち、日本語は初級修了まで行かなくてもほんの少々話せばいい、そのために時間をかけたくないのも、杉谷コースは初級を中心にして現状程度で運営すればいいという考えが窺える。五福キャンパスまでいかななくても、杉谷コースで半年程度日本語を学習すればいいという認識のようだ。留学生の方も「読む・書く」まで必要というのは半数で、「話す」(34件 94%) 「聞く」(26件 72%) を必要とする割合が高いので、初級程度で十分という認識は教員と留学生に共通していると言える。教員と留学生で大きく答えがずれているのは日本語が必要な場面として、留学生は、「店」に次いで第二に「研究室」(30人 79%) を挙げ、専門教員は「大学外」(17件 85%) に次ぐ、「研究室」(8件 40%) での必要性を留学生より低く考えていることである。留学生にとって、研究室での活動の重要性と、そこでの意思疎通にも日本語が必要だと考えていることは理解されなければならないだろう。

専門教員へのアンケート結果から、専門教員も日本語が必要だと考えてはいるが、そのためには、初級までいかなくとも、杉谷コースで半年程度勉強すれば十分との認識が明らかになった。留学生が「研究室でも日本語が必要」と考えているのに対し、専門教員は主に学外で日常の用が足せばいいとの考えである。専門教員にとって「杉谷日本語コース」は初級中心のクラス編成で、全員に半年程度初歩の日本語を学習させればいいという認識であると考えられる。

5. 3 日本語教員への「重要度／満足度調査」

2006年8月にコース担当の日本語教員に改善点を探る「重要度／満足度調査」を実施した。札幌2006を参考に、プログラムの実施状況に関する以下の8項目に重要度と満足度を4段階(最高4、最低0)で表してもらい、日本語教員6人の平均得点から不満度と積算ニーズ度を求めた。集計結果は[表3]の通りであった。

[表3] 日本語教師アンケートの集計結果

<各項目の集計結果>	X	Y	Z	X×Y
項目 / 平均値	重要度	満足度	P-満足度 p=4	積算ニーズ度
A. 学習環境	2.8	3.2	0.8	2.4
B. 利用できる機器	3.2	2.7	1.3	4.2
C. 利用できる教材・資料	3.5	2.8	1.2	4.1
D. カリキュラム	4.0	2.8	1.2	4.7
E. クラスの環境	3.5	2.8	1.2	4.1
F. 教師間の協働	3.7	3.5	0.5	1.8
G. コーディネータの支援	3.5	3.7	0.3	1.2
H. 事務の支援	2.8	2.7	1.3	3.8

[表 3-1] 不満度順の改善点

順	項目	不満度
1	B. 利用できる機器	1.3
2	H. 事務の支援	1.3
3	C. 利用できる教材・資料	1.2
4	D. カリキュラム	1.2
5	E. クラスの環境	1.2
6	A. 学習環境	0.8
7	F. 教師間の協働	0.5
8	G. コーディネータの支援	0.3

[表 3-2] 積算ニーズ度順の改善点

順	項目	積算ニーズ度
1	D. カリキュラム	4.7
2	B. 利用できる機器	4.2
3	C. 利用できる教材・資料	4.1
4	E. クラスの環境	4.1
5	H. 事務の支援	3.8
6	A. 学習環境	2.4
7	F. 教師間の協働	1.8
8	G. コーディネータの支援	1.2

単純な不満足度は [表 3-1] のように「利用できる機器」、「事務の支援」、「利用できる教材・資料」の順に高く、重要度を加味した積算ニーズ度は [表 3-2] のように「カリキュラム」、「利用できる機器」、「利用できる教材・資料」の順に高い。共通する項目として「利用できる機器」「利用できる教材・資料」が、また最も改善を急ぐべき項目として「カリキュラム」が挙げられる。日本語教員への調査結果からは、カリキュラムと利用可能な教材、機器への要望が強いことが明らかになった。

カリキュラムは教育の重要項目であることから、カリキュラムのどのような点に不満があるかを更に詳しく調査する必要があると感じた。そこで、カリキュラムの内容に踏み込んで、同様の「満足度／重要度調査」を再度実施した。集計結果は [表 4] の通りであった。

[表 4] 日本語教師アンケートの集計結果 カリキュラムについて

<各項目の結果集計>	X	Y	Z	XxZ
項目 / 平均値	重要度	満足度	p-満足度 p=4	積算ニーズ度
A. 全体のクラス配置	3.7	2.7	1.3	4.9
B. クラスの時間配分	3.5	2.5	1.5	5.3
C. レベルと内容の整合性	4.0	2.5	1.5	6.0
D. 目標の明確化	4.0	2.7	1.3	5.3
E. 教授方法	3.5	3.0	1.0	3.5

[表 4-1] 不満度順の改善点

順	項目	不満度
1	B. クラスの時間配分	1.5
2	C. レベルと内容の整合性	1.5
3	A. 全体のクラス配置	1.3
4	D. 目標の明確化	1.3
5	E. 教授方法	1.0

[表 4-2] 積算ニーズ度順の改善点

順	項目	積算ニーズ
1	C. レベルと内容の整合性	6.0
2	D. 目標の明確化	5.3
3	B. クラスの時間配分	5.3
4	A. 全体のクラス配置	4.9
5	E. 教授方法	3.5

単純な不満度は、「クラスの時間配分」「レベルと内容の整合性」、次いで「全体のクラス配置」「目標の明確化」に不満が強いが、積算ニーズ度をとると「レベルと内容の整合性」が最も高く、次いで「目標の明確化」「クラスの時間配分」となる。双方に共通して、不満が高いのが「レベルと内容の整合性」次いで「クラスの時間配分」となる。調査票に添えられたコメントに「理想だけを言えば週1回90分では少ないというのが本音ですが、これは杉谷キャンパスの環境、学生の捻出できる時間など諸事情を考えるとこうせざるをえないなと思っています。」とあり、日本語教師の立場としては、「クラスの時間が絶対的に少ない」というのが「クラスの時間配分」に対する不満の内容であることが窺える。

6. 留学生への「授業後アンケート調査」(2006年度前期)

2006年度前期終了後、「授業後アンケート調査」を行った。杉谷コースの当初登録者は、初級11人、中級19人、上級10人、レベル延べ人数40人であった。クラス開設数が少ないため、同一の学生が複数のレベルに在籍している現象もあり、異なり登録者数は計28人、うち最後までクラスに出席し出席数が半数を越えた修了者はレベル延べ人数25人(修了率63%)、異なり人数で20人(修了率71%)であった。修了者20人のうち調査回答者は15人(回答率75%)であった。調査の結果は以下の[表5]に示す。

[表5] 平成18年度前期 留学生の授業後アンケート

1. 日本語学習の必要性

1.1.1 日本語学習の目的 記入者15人中 (複数回答)	日本語能力向上	15 (100%)	3.1 出席状況	4:100%	7(47%)
	日本社会文化の理解	14 (93%)		3:75%	5(33%)
	単位のため	3 (20%)		2:50%	3(20%)
	日本人と友達になる	13 (87%)		1:25%	0(0%)
	授業、ゼミの理解	12 (80%)		0:0%	0(0%)

回答者15人中	必要	必要ない	無記入	合計
1.2 日本語は必要か	14 (93%)	0 (0%)	1 (7%)	15 (100%)

1.2.1 必要な場面 15人中 (複数回答)	研究室	8 (53%)	1.2.2 必要な能力 15人中 (複数回答)	話す	14 (93%)
	事務室	6 (40%)		聞く	11 (73%)
	近所	5 (33%)		読む	6 (40%)
	教育関係	5 (33%)		書く	5 (33%)
	店	8 (53%)			

3. クラスと授業について

	はい	いいえ	無記入	合計
3.2 レベルは適切か	12 (80%)	1 (7%)	2 (13%)	15 (100%)
3.3 内容は適切か	14 (93%)	1 (7%)		15 (100%)
3.4 日本語力は向上したか	15 (100%)			15 (100%)
3.5 教師の準備良いか	15 (100%)			15 (100%)
3.6 達成度に満足か	14 (93%)	1 (7%)		15 (100%)
3.7 クラスは役に立ったか	15 (100%)			15 (100%)

3.4 向上した点 (複数回答)	話す	14 (93%)
	聞く	12 (80%)
	読む	9 (60%)
	書く	3 (20%)
	文法理解	6 (40%)
	専門理解	6 (40%)

大学統合直後の平成 17 年 10 月に在籍留学生全体に実施した「日本語と日本語クラスについてのニーズ調査」と大きく回答が異なったのは、日本語学習の目的と日本語が必要な場面である。留学生全体に対する調査では、日本語学習の目的で 80%をこえたのは「日本語能力の向上」31 人 (82%) だけで、他は「日本文化の理解」と「授業・ゼミの理解」が 26 人 (68%)、「日本人と友だちになる」17 人 (45%) であった。それに対し、クラス在籍者では「日本語能力の向上」15 人 (100%)、「日本文化の理解」14 人 (93%)、「日本人と友だちになる」13 人 (87%)「授業・ゼミの理解」12 人 (80%) と軒並み 80%を越える高い率を示した。自由選択のクラスに在籍し、修了するような熱心な学習者の場合には、日本語学習に対する強い意欲と関心が認められる結果となった。

日本語の必要性については、留学生全体も 41 人 (93%)、コース修了者も 14 人 (93%) と同率であったが、日本語が必要な場面については、留学生全体では「研究室」30 人 (79%)、「店」41 人 (93%) が高率なのに対して、コース修了者では「研究室」8 人 (53%) も「店」8 人 (53%) も半数程度であり高くなかった。前述の目的が大変レベルの高いものだったことを考慮すると、コース修了者にとっては「店」での日本語などは入門レベルであり、あまり必要性を感じないのではないかと考えられる。

しかし、高いレベルの日本語が必要だと予想される「研究室」での日本語の必要感が下がるのは、理科系の研究室では英語に比べて日本語の必要性が本当に低いということを意味するのである。向上した点として、「読む」「書く」の達成度が「話す」「聞く」の達成度と比べて低い

ことも関係があるのかもしれない。しかし、この点について明確にするためには、さらに補充調査が必要である。

「授業後アンケート」で、レベルや内容、教師の準備などクラスの活動についてのすべての項目で、肯定的な回答「はい」が 80%以上を得ていることも注目に値する。非常勤5名と専任1名による日本語のクラスの授業運営について、高く評価されているとすることができる¹。

7. 「杉谷キャンパス日本語コース」の現状把握と目標設定の試み

今回、「杉谷キャンパス日本語コース」のプログラム評価の予備調査として、立場の異なる利害関係者3者に実施した4件の調査から、プログラムの多角的な実態把握を試みた。これらの結果を総合的に考察して、「杉谷キャンパス日本語コース」に要求されているものを、コース目標として抽出することを試みてみよう。

参加者であり受益者である留学生、実施側責任者であり受益者である専門教員、実施担当者であり日本語教育専門家である日本語教員の3者は杉谷コースに対して各々異なるニーズと不満を抱いていることが明らかになった。

- 1) 留学生全体への調査結果から、生命系の実験に忙しい留学生はとにかく時間がないので、五福キャンパスまで行くことは難しく、杉谷日本語コースが強く必要とされていることが明らかになった。日本語を必要とする度合いも専門教官の認識以上に強いことが分かった。
- 2) 専門教官への要望調査の結果からは、理系の専門の常として、時間がない、時間が惜しいという認識は留学生と同様であるが、半年程度、初級程度と限定的ながら、日本語学習の必要性、杉谷コースの必要性は認識されていることが分かった。但し、今以上に時間をとられることには否定的で、現状程度の日本語コースを維持すればいいとの認識だと思われる。
- 3) コース担当の日本語教員に対する重要度・満足度調査からは、カリキュラムに対する不満、改善要求が強いことがわかった。カリキュラムのなかでも、日本語コースの時間数に対する不満が強く、日本語教育の専門家の目から見ると、杉谷コースの授業時間は絶対的に足りないという認識が明らかになった。

これら3者の共通点は、「日本語学習は必要だ」という認識である。そして、留学生には「時間がないから杉谷で」「『話す・聞く』を中心に」というニーズが、専門教官には「時間がないから半年で」「初級程度でいい」という要望があることがわかった。それに対して、日本語教員には「カリキュラム」について、中でも「クラスの時間数」「レベルと内容の一致」というような項目への不満が強いことがわかった。

これらを矛盾させずに一致させることは非常に困難であるが、一つの方法として、とにかく「初級だけ手厚く、半年で仕上げる」クラスを実現するという方法が考えられる。初級クラスの時間

¹ 但し、問題は修了せずに中途離脱した学習者の方であろう。短期研究員等短期滞在者が多いので既に帰国した学習者も多いが、彼らに対する follow up interview などが今後必要になってくると考えられる。

数をもう少し増やす事は可能であろう。しかし、そうした場合、学生はきちんと出席できるのだろうか。クラスの週当たり時間数が多いと出席率によって学生間のレベル差が大きくなることが予想される。学習者として正規学生ばかりでなく、研究員や家族も含む杉谷キャンパスの現状ではクラス内で学習者のニーズが絞り込めずに悩む状況が出て来ることは避けられないであろう。

こうした様々な矛盾を抱え込みながら運営されている、不十分なクラス数の日本語コースであるにもかかわらず、クラスの内容、授業方法などについて、コース修了者の「授業後アンケート」で高い評価を得ていることは特筆に値する。

7. まとめ

今回初めて3つの異なる視点から多角的な調査（トライアングュレーション）を実施することで、1つの視点からでは見えてこないプログラムの全体像の一端を垣間見ることができたように思う。プログラム評価に複数の視点が必要とされる意味も実感された。今回採取したデータも、より精密な分析をすれば更に様々なことが明らかになるだろう。今回は生データの一次分析ということで、後は次回に譲りたい。

今後、さらに方法論の研鑽を積み、調査のデザインを精密化して、調査を進めていきたい。統計的手法に不向きな小規模プログラムなので、今後は質的な評価をより多く取り入れて、小規模プログラムの評価の手法を提案していくことを目指して行きたいと思う。

参考文献

- Brian K. Lynch 1996 *Language Program Evaluation Theory and practice*, Cambridge University Press.
- 札野寛子 2004 「「プログラム評価」とは何か：基本概要とケーススタディ」, 大学教育学会誌 26-1, pp107-118
- 札野寛子 2006 「改善ニーズを見極めるための重要度・満足度評価」, 日本語教育学会 2006 年度研究集会【実践研究フォーラム】 予稿集

[参考資料 1] 杉谷キャンパス日本語コース授業時間数の変遷

1) 学生課補講期 (2000 年度まで)

曜日と時間	月	火	水	木	金
9:00-11:00			薬学日本語 非常勤		
1:30-3:30		日本語 非常勤		日本語 非常勤	

2) 必修日本語コース (開設当初) 2001 年度春

曜日と時間	月	火	水	木	金
9:00-11:00			薬学日本語 非常勤		
1:30-3:30	日本語 B 専任	日本語 A 非常勤		日本語 B 非常勤	日本語 A 専任

必修日本語コース 2001 年度秋

曜日と時間	月	火	水	木	金
9:00-11:00		日本事情 E 専任	日本語 C 非常勤		
1:30-3:30	日本語 A 専任	日本語 B1 非常勤		日本語 B2 非常勤	日本語 D 専任

3) 必修日本語コース (最終期) 2005 年度秋

曜日と時間	月	火	水	木	金
10:30- 12:00	日本語 A1 専任	日本語 E 専任	日本語 A1 専任	日本語 A2 非常勤	日本語 D 非常 勤
1:30- 3:00	日本語 B 専任	日本語 A2 専任		スピーチ C 非常勤	日本語 B 非常勤
3:00- 4:00	漢字 専任	Office H. 専任		Office H. 専任	Office H. 専任

4) 選択日本語コース (現行) 2006 年度春

	月	火	水	木	金
8:50- 10:20		日本語 A 専任教員	日本語 A 専任教員		
10:30- 12:00	日本語 A 専任教員		日本語 D 専任教員	日本語 A 非常勤講師	薬学日本語 D 非常勤講師
1:30- 3:00	日本語 B 専任教員	日本語 C 専任教員	会話初中級 B 非常勤講師	日本語 C 非常勤講師	日本語 B 非常勤講師
3:00- 4:00	Office H. 専任教員	Office H. 専任教員		Office H. 専任教員	Office Hour 専任教員

【資料2】留学生アンケート「日本語コースのニーズと日本語コースの将来」

◇ 「はい」か「いいえ」に○を、また、あてはまるものいくつかを○をかくてください。

1. 日本語コースのニーズ

1.1. あなたにとって日本語は必要ですか。(はい→1.1.1./いいえ→1.1.2へ)

1.1.1. はい → どんどこで必要ですか
 研究室で 事務所で 近所で 保育園で 学校で 店で
 その他 ()

→ どんどこ能力が必要ですか、
 話す 聞く 読む 書く
 その他 ()

1.1.2. いいえ → どうして必要ありませんか。
 a. 日本人と問題がないから。(はい/いいえ)
 b. 日本の生活で日本語は必要ないから。(はい/いいえ)
 c. 日本語ができるから。(はい/いいえ)
 d. その他 ()

1.2. 日本語コースで勉強(します/しました)か。
 A はい しました / これから します → 1.3.と2へ
 B いいえ → それはなぜですか。
 a. 日本語を勉強したくないから。(はい/いいえ)
 b. 勉強しても効果がないから。(はい/いいえ)
 c. コースはつごうがよくないから。(はい/いいえ)
 d. その他 ()
 e. どんなクラスがあったら、参加しますか。
 ()

1.3. 日本語クラスに つごうがよい日と時間はいつですか。
 マークをかくてください。(はい/いいえ) ① くることができる ② つごうが悪い

	月	火	水	木	金	土	日
8:00-9:00							
9:00-10:20							
10:30-12:00							
13:20-14:50							
15:00-16:30							
17:00-19:00							
20:00-							

2. 日本語コースの将来

2.1. 五福キャンパスの日本語コースに参加したいですか。(はい→2.1.1./いいえ→2.1.2へ)

2.1.1. どのコースに参加したいですか。 1) 集中コース 2) 補講コース

<参考> 富山大学五福キャンパスのコースと杉谷キャンパスの日本語コース

1) 五福キャンパスの日本語研修コース	初級 週20コマ、総計300コマ	6ヶ月
2) 五福キャンパス日本語補講コース	初級(週11)、中級(週7)、上級(週6) 計週25コマ	
3) 杉谷キャンパス 日本語コース	初級(週2)、中上級(週1) 計週9コマ	

2.1.2. どうして参加したくないですか。
 a. 時間がないから。(はい/いいえ)
 b. 交通が不便だから。(はい/いいえ)
 → 車やシャトルバスがあったら、行きますか。(はい/いいえ)
 c. クラスが多すぎるから。(はい/いいえ)
 d. 杉谷キャンパスにクラスがあるから。(はい/いいえ)
 → 杉谷コースがなかったら行きますか。(はい/いいえ)
 e. その他 ()

2.2. 杉谷キャンパスに日本語コースは必要ですか。(はい→2.2.1./いいえ)

2.2.1. どうして必要ですか。
 a. 五福まで行く時間がないから。(はい/いいえ)
 b. 近くて便利だから。(はい/いいえ)
 c. クラスが少なすぎてやすいから。(はい/いいえ)
 d. その他 ()

2.3. 日本語コースに参加する目的は何ですか。
 a. 日本語能力の向上。(はい/いいえ)
 b. 日本社会や文化を理解するため。(はい/いいえ)
 c. 単位をとるため。(はい/いいえ)
 d. 日本人と友達になるため。(はい/いいえ)
 e. 授業やゼミを理解するため。(はい/いいえ)
 f. その他 ()

2.4. 今のあなたの日本語の会話能力はどれくらいだと思いますか。

主要なレベル	: 初級	中級	上級	超級
初・中級サブレベル	: 低い	中位	高い	

【資料3】専門教員アンケート (3~4頁)

◇ 「はい」か「いいえ」に○を、また、あてはまるものいくつかを○をかくてください。

1. 日本語コースについて

1.1. 杉谷キャンパスで日本語コースが開講されていることを知っていましたか。
 (はい/いいえ)

1.2. A 日本語が医学部の博士課程の留学生には必修であり、修士課程には選択であったことを知っていましたか。(はい/いいえ)
 B 薬学部の留学生には自由単位であることを知っていましたか。(はい/いいえ)

1.3. 研究室の留学生、研究者は日本語コースに参加していましたか。
 必修の学生は参加していた。(はい/いいえ)
 留学生は人体参加していた。(はい/いいえ)
 日本語が出来ない人は参加していた。(はい/いいえ)
 日本語が必要だと思ふ人は参加していた。(はい/いいえ)
 研究者も参加していた。(はい/いいえ)
 最初の半年か1年だけ参加していた。(はい/いいえ)
 その他の状況 ()

1.4. 留学生に日本語会話力は必要だと思いますか。(はい→1.4.1./いいえ→1.4.2.)

1.4.1. はい → どんどこで必要だと思いますか。
 研究室で 事務所で 病院で 大学の外で 保育園学校などで
 その他 ()
 → どんどこ能力が必要だと思いますか。
 話す 聞く 読む 書く その他 ()

1.4.2. いいえ → どうして必要ありませんか。
 a. 日本人と問題がないから。(はい/いいえ)
 b. 研究生活で日本語は必要ないから。(はい/いいえ)
 c. 英語が上手になってはいいから。(はい/いいえ)
 d. その他 ()

1.5. 留学生に日本語を学習させたいと思いますか。(はい→1.5.1./いいえ→1.5.2.)

1.5.1. はい → それにかけてもよい時間は 週 () 時間 位まで
 期間としては、来日から (半年、1年、1年半、2年、すぎなだけ)

1.5.2. いいえ → それはなぜですか。
 a. 日本語を使う必要がないから。(はい/いいえ)
 b. 学習させても効果がないから。(はい/いいえ)
 c. 研究がいそがしくて時間がないから。(はい/いいえ)
 d. その他 ()

2. 留学生の日本語習得上の問題点の解決について

2.1. 問題点

1) 大学院生は入学に際して日本語能力条件がなく初級の学生が多いが、日本語能力の必要性は高い。薬学研究科の修士課程で行われる専門の日本語の授業が理解できない。最近、奨学金にも日本語能力が問われるようになった。日本語能力がないと、請求書も回覧板も読めず、日常生活、家族の問題に対処できない。

2) 杉谷キャンパスの日本語コースは時間数が決定的に不足している。現在のクラス数で非漢字圏のゼロレベルの学習者が日本語を習得することは極めて困難である。ゼロから日常の日本語能力を習得するには、最低でも毎日2コマ程度の学習が半年必要である。

2.2. 解決策について

1) A 少なくとも初級終了程度の日本語を全員に習得させる必要があると思いますが。(はい→2./いいえ→B、2)
 B それはどうですか。
 奨学金で不利になることはない。(はい/いいえ)
 家族や日常生活の問題は研究室でフォローする。(はい/いいえ)
 行きたい人だけ行かせればいい。(はい/いいえ)
 基準に沿って必要な学生は行かせればいい。(はい/いいえ)
 大学院の授業は英語で理解できればいい。(はい/いいえ)
 本人の研究で困らなければいい。(はい/いいえ)
 その他の意見 ()

2) A 日本語の必要度が高い学生は富山大学の集中コースや補講コースに行かせますか。(はい→3./いいえ→B、3)
 B それはどうですか。
 研究の時間が惜しい。(はい/いいえ)
 バス代や時間がかかって、不便である。(はい/いいえ)
 そんなに日本語は必要ではない。(はい/いいえ)
 その他の意見 ()

3) A 日本語が出来ない学生は杉谷キャンパスの日本語コースに行かせますか。(はい→4./いいえ→B、4)
 B それはどうですか。
 そんなに日本語は必要ではない。(はい/いいえ)
 たとえ、1日1、2時間でも時間が惜しい。(はい/いいえ)
 その他の意見 ()

[資料4] 日本語教員に対する「重要度／満足度調査」

2006年度富山大学杉谷日本語コース評価票 2006.08.03

重要度/満足度評価 Importance-Needs/Satisfaction Ratings

この評価は、あなたが関わっている「富山大学杉谷日本語コース」において、より充実した日本語教育を実現するために、優先的に改善すべき課題が何であるかを見極めることを目的としています。指図にしたがって、以下の質問にお答えください。

重要度

I. まず、あなたにとって以下の各項目の内容は、日本語を教えるためにどの程度重要か（あるいは必要か、その質/条件/内容に関心があるかを含む）0-4の5段階で判定してください。

満足度

	大変重要/必要である とても関心がある					全く不要である 関心がない				
	100%	75%	50%	25%	0%	100%	75%	50%	25%	0%
	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
A. 学習環境 (広さ・照明・騒音・空調設備)	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
B. 利用できる機器 (ビデオ・OHP・プロジェクター・CDプレーヤー)	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
C. 利用できる補助教材・参考資料	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
D. カリキュラム (学習目標、学習内容、授業時間数、進度)	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
E. クラスの環境 (学習者数、レベルのばらつき、出席率)	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
F. 教員の協働	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
G. コーディネータの支援体制	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
H. 事務管理上の支援体制 (時間管理、駐車場、給与)	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0

II. 続いて、以下の各項目について、現状でどの程度満足しているか、0-4の5段階で判定してください。

	大変満足している 全く問題がない					大変不満である 問題ばかりである				
	100%	75%	50%	25%	0%	100%	75%	50%	25%	0%
	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
A. 学習環境 (広さ・照明・騒音・空調設備)	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
B. 利用できる機器 (ビデオ・OHP・プロジェクター・CDプレーヤー)	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
C. 利用できる補助教材・参考資料	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
D. カリキュラム (学習目標、学習内容、授業時間数、進度)	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
E. クラスの環境 (学習者数、レベルのばらつき、出席率)	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
F. 教員の協働	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
G. コーディネータの支援体制	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0
H. 事務管理上の支援体制 (時間管理、駐車場、給与)	4	3	2	1	0	4	3	2	1	0

* どうもありがとうございました。